

2012 夏休み すいせん図書

～本の森へ～



西東京市図書館

1・2年生

「ともだちやもんな、ぼくら」 くすのきしげのり 作 福田岩緒 絵／えほんの杜
カブトムシをみつけたぼくたちが、クヌギのきよのぼると「こらあっ！なにをやっ
とるか！！」とつぜんのカミナリごえ。3人ともにげた。ヒデトシがこけて、カミナリ
じいさんにつかまった。ぼくとマナブはにげた。でも「ヒデトシ、どうなってるんやろか」
ぼくたちのあたまは、ヒデトシのないたかおでいっぱいになった。



「チュンチエー中国のおしょうがつー」 ユイ・リー・チョン 文 チュ・チョンリヤン 絵
中由美子 訳／光村教育図書
おしょうがつのあさ、あつあつの湯圓をたべると、ガチツとかたいものがはにあたり
ました。なんと、こうろんのコインが、わたしの湯圓のなかにはいっていました。わ
たしは、こうろんがにげないように、コインをポケットにしまいました。



「だいすきなものーネパール・チャウコット村のこどもたちー」 公文健太郎 写真／偕成社
みんなのすきなものを、おしえてくれますか。ネパールの首都カトマンズから峠を
一つこえた先にあるチャウコット村のこどもたちが、「すきなもの」をおしえてくれま
した。“ぼくは土がすき”“おどること、うたうこと、勉強すること、書くこと”“ひこうき
がすき”“地面がすき”いろいろなものがすきな子どもたちの写真えほんです。



「だっこの木」 宮川ひろ 作 渡辺洋二 絵／文溪堂
わたしは、浅草ののんさまのけいだいにたっている、いちようの木。ある日、ちいさなカ
ズヤはおとうさん、おかあさんとさんぽにきて、三人で手をつないでわたしをかこみ「おおき
な木をだっこしたね」とよろこんだ。それから、だっこの木とよばれるようになった。おとうさ
んが兵隊にいく日、三人は「また、いつの日か三人で…」とわたしをしっかりとっこしてくれた。



「たっくんとぼく」 清水千恵 作 山本祐司 絵／文研出版
ぼく、かずや。小学一年生になったんだ。入学しきの日。きょうつのうしろでおか
あさんにくっついてないてる子がいる。それが、たっくんだったんだ。たっくんのせき
はぼくのとなり。たっくんは、かたづけやきがえがひとりじゃできないから、いつもぼ
くがてつだってあげる。でも、ある日、大じけんがおきた。



「おまじないのてがみ」 赤羽じゅんこ 作 石井勉 絵／文研出版
おまじないをかんがえたことある？ユズちゃんのおばあちゃんによると、おまじな
いのことは、へんてこで、いみがめちゃくちやで、いいやすいのがいいのだとか。ユ
ズちゃんもためてみることにしました。



「おじいちゃんとケーキをつくらう」 マリサ・ロペス＝ソリア 作 宇野和美 訳
つちだよしはる 絵／日本標準
なかよしのともだちや、犬のマコとわかれて、新しい家にひっこしてきた女の子、カ
ミーラ。いやなことだらけで、かなしくなっていたカミーラのところへ、おじいちゃん
がたずねてきて、「クリスマスのおかしをつくらう」といいます。気ののらないカミー
ラでしたが、話をしながらつくっているうちに、元気ができました。



「ゆきのかたち」 高橋健司 監修 片野隆司 写真撮影／ひさかたチャイルド
まっしろにふりつもったゆきのうえについた、いろいろなあと。これはきつねのあ
しあと。こっちなみのようなもようは、かぜがつくったんだって。ゆきのかいじゅう
みたいなふしぎなかたちには、びっくり！
しぜんがつくった、いろいろなゆきのかたちをしょうかいする写真えほん。



3・4年生

「っぼい」 ピーター・レイノルズ ぶん・え なかがわちひろ やく／主婦の友社
えをかくのが、だいすきなラモン。ところが、かびんのえを書いているラモンをおにいちゃんが「ぜんぜんにでないじゃん！」とおおわらいしました。ラモンは、ちゃんとした、ほんものそっくりなえをかこうとしますが…うまくいきません。そんなとき、いつものマリソルが「あたし、このえがすき」といつてくれたのです。



「大きな時計台小さな時計台」 川嶋康男 作 ひだのかな代 絵／絵本塾出版
井上少年が、札幌時計台の前に立っています。札幌にあそびにきていたのですが、なんどもみているうちに、時計台がだいすきになりました。「おとなになったら、この時計のきかいをいじれるようになりたい」そんな気持ちになりました。少年は、時計のペンギょうをたくさんして、「時計台のお医者さん」になり、長い間、時計台を守っています。



「ヒロシマのいのちの水」 指田和 文 野村たかあき 絵／文研出版
日本がせんそうをしていたころ、利枝がほいくえんのおやつのはじめをしていると、ドカン！と音がしてみんなふきとばされた。こどもたちがいない！さがしまわると、あちこちに人がたおれ水をほしがっていた。でも、そのときはこどもたちをさがすために、みずをくんであげることができなかった。せんそうがおわってからずっと、利枝はやまのお寺の水をくんで運び、原爆いれいひにおそなえしているのです。



「つくるいものやはじめます-お江戸あやかし物語-」 水沢いおり 作 石橋富士子 絵／偕成社
お江戸の町のちいさな店<つくるいものや こまち>には秘密がありました。じつは、お屋敷の蔵に眠っていたさいほう箱の中身が、あやかしとなってはじめた店なのです。はたらくのは、もとはまち針のこまちねえさん、糸切りばさみのちよきち、そしてぬい針のぬいばあ。店をひらいて十日、はじめてやってきたお客さんは、こがねいろ色のめずらしい布地を持った女の子でした。



「うさぎの庭」 広瀬寿子 作 高橋和枝 絵／あかね書房
修は自分の気持ちがあまく話せない。心をうちあけられるのは、飼っているうさぎのチイ子だけ。母さんも父さんもうさぎの悪いことばかりいう。でもいいかえすとまた何をいわれるかわからないからだまっている。ある日の放課後、クラスメイトの小野くんと会った修は、うさぎを飼っていることを小野くんに話した。



「ピーターサンドさんのねこ」 ルイス・スロボドキン 作 清水真砂子 訳／あすなろ書房
夏がきて、ふだんは町にくらしている人びとがホテル島にもどってくると、みんな「ねこがいたら、いいのにな」と思います。その願いをかなえてくれるのが、ピーターサンドさんでした。ピーターサンドさんは、漁師で一年じゅう島にくらしてたくさんこのせわをしているのでした。ところがある夏、じけんがおきました。



「リキシャ★ガール」 ミタリ・パーキンス 作 ジェイミー・ホーガン 絵 永瀬比奈 訳／鈴木出版
バングラディッシュの村に住むナイマは十歳の女の子。この村の伝統で、祝日の日に、家の前の敷石や小道をかざる、アルパナと呼ばれるもようをかくことについては、村で一番じょうずです。でも、アルパナをかくことでは、お金をかせぐことができません。リキシャの運転で、毎日つかれてかえってくるお父さんの役に立ちたいナイマは、お父さんを休ませてあげるために、ある計画を思いつきます。



「月へーアポロ11号のはるかなる旅ー」 ブライアン・フロッカ 作・絵 日暮雅通 訳／偕成社
空のかなたにうかぶ月。地上にしているのは、特別にあつらえた服にぴったりと身をつつんだ3人の男たち。彼らは、ロケットに乗り込み宇宙へと飛び出していく。1969年7月。アメリカ・フロリダ州から発射されたアポロ11号に乗って、人類が初めて月に降り立つまでをえがいた絵本。



5・6年生

こうぎょく
「紅玉」

後藤竜二 文 高田三郎 絵／新日本出版社

りんごの季節になると、父はきまってぼくらにおなじ話を語り聞かせた。1945年秋、戦争が終わった年にも、父のりんご畑では、赤いりんごがわんさとみのった。いよいよ収穫というころ、りんご畑がおそわれた。日本人ではなかった。川向こうの炭鉱で働かされていた朝鮮と中国の人びとの群れだった。父のとった行動は…。



「雪の結晶ノート」 マーク・カッシーノ 作 ジョン・ネルソン 作 千葉茂樹 訳／あすなる書房

みなさんは、雪の結晶を見たことがありますか？
小さな小さな雪の結晶、なぜこんなに美しく、複雑なカタチをしているのでしょうか？
はじまりはある冬の日。空高く、さむいさむい雲のなか。

雪のものがたりがはじまります。



「ぼくが一番望むこと」 マリー・ブラッドビー 文 クリス・K・スーンピート 絵 斉藤規 訳／新日本出版社

ぼくは毎日、パパとジョン兄さんといっしょに、朝がまだ来ないうちから、岩塩の精製所で働くために家を出る。でも、ほんとうは働くよりも、文字をおそわり字が読めるようになりたい。「字がならいたい」と言ったぼくに、ある日ママが青い表紙の小さな本を手わたした。その日から、ぼくの文字の勉強がはじまる。



「妖怪一家九十九さん」

富安陽子 作 山村浩二 絵／理論社

九十九さん一家は人間たちにまじって、化野原団地のB棟・地下十二階に住んでいます。この団地が建つ前には雑木林が広がっており、大勢の妖怪が住んでいました。ある日、人間たちがやって来て、林の木を伐り払い巨大な団地を作り始めたというわけです。妖怪たちは、驚きました。妖怪の親玉ヌラリヒョンは市役所の市民サービス政策課の窓口に団地建設反対の願いをしに行きました。



「クルーの空」

熊谷千世子 作 宮尾和孝 絵／文研出版

5年生の大地のクラスに、中国からの帰国子女、大山美乃さんが転校してきた。けれども美乃さんはいつもだまっただままで、学校の行事にも参加しようとしなない。最初のうちは話しかけたりしていたクラスのみんなもだんだん離れていき、大地もついつい美乃さんに対して意地悪をしてしまう。そんなある日、大地は美乃さんが、傷ついたカラスの面倒を見ていたことを知る。



「11号室のひみつ」 ヘザー・ダイヤー 作 相良倫子 訳 ピーター・ベイリー 絵／小峰書店

ホテルのあき部屋におきざりにされていたトビーは、手伝いをするこゝで、ここに正式に住むことをゆるされていました。ある日、風でとばされたせんたく物をさがして、棧橋の下へと向かったトビーは、そこで、青白い顔をした女の子、人魚のエルザと出会います。エルザ一家のことはひみつにすると約束したトビーでしたが、もらった黄金の指輪を、ホテルの支配人ハリスさんに見つけられてしまったことから、大そうどうがおこります。



「ミンのあたらしい名前」

ジーン・リトル 著 田中奈津子 訳／講談社

赤ん坊のころに捨てられ、何度も里親がかわった11歳の少女ミン。彼女は無表情の中に、自分の気持ちを隠してしまうようになっていた。四度目の里親イーニッドに、もう引き取りたくないと言われたところに現れた、小児科の医師、ジェス。彼女と一緒に暮らし始めたミンは、自分を信じてくれるやさしい人達と、あたたかい日々を過ごす。しだいに、ミンの閉ざされていた心は…。



「図解東京スカイツリーのしくみ」

NHK出版 編／NHK出版

東京スカイツリーは高さ634メートルの電波塔として、東京都墨田区に建っています。2008年7月に建設がはじまり、約3年半後の2012年2月に竣工しました。この本では、どのようにして建てられたのか、建物の中身など東京スカイツリーに隠されたひみつをイラストと写真で分かりやすく紹介しています。さあ、この本を読んで「東京スカイツリー博士」になろう。

